

どこまで踏み込むか通信キャリア J:COM が狙う先手必勝

「固定系の融合は、実は何も生まないのではないか」。地上波テレビというキラーコンテンツの獲得に目途が立ち、一気にトリプルプレイの普及を狙う通信事業者だが、事態はそれほど容易に進みそうにない。

「IPで再送信するのは構わないが、不公平な戦いには声を大にして反対する。正々堂々と戦うべきだ」

突如、現実のものとなった地上デジタル放送のIPマルチキャストによる再送信。日本最大のCATV局統括運営会社(MSO)、ジュピターテレコム(J:COM)の森泉知行社長は、この話が明らかになった直後の中間決算説明会で、露骨に不快感と対抗心を剥き出しにした。

森泉社長が「不公平」と抗議したのは、情報通信審議会の第2次中間答申にある「2006年からSD(標準画質)で開始」という箇所である。

地上デジタル放送の最大の特徴は、画質のHD(ハイビジョン)化。SDでの再送信を認めることは、デジタル化の意義に反する。多額の設備投資を行い、最初からHDで伝送してきたCATV事業者からすれば、と

ても許せるものではなかった。

この反発に対し、総務省の安藤地上放送課長は「2006年に開始するSD伝送は、あくまで著作権保護技術などの検証が目的。ビジネスではない。CATVとの競争は起こらないようにする」と説明。さらに「HD伝送が始まった2008年以降もSD伝送が認められるのではないか」というCATV事業者側の疑念についても、「続ける理由がない」として否定している。

一応の回答を得たCATV業界だが、これで不安が払拭されたわけではない。CATVと通信という出自の異なる2つのトリプルプレイ事業者、両者を決定的に隔てていたのはCATVが地上放送を再送信できて、通信が再送信できないことだった。しかし2008年、この競争構造は一変する。

地上デジタル放送の再送信という

新たな要素も加わり、いよいよ今から本格的なトリプルプレイ競争時代に突入する。Part2では、まずCATV事業者も含めた通信事業者主要各社の戦力を分析、次にトリプルプレイサービスの市場性を探っていく。

CATVの囲い込み

Part1で触れた通り、光ファイバー上で地上放送を再送信している通信事業者は、すでに存在する。ケイ・オプティコムだ。

同社の「eo光テレビ」は、関西電力の子会社であるCATV事業者、ケイ・キャットがケイ・オプティコムの光ファイバーを使って提供しているサービスだ。「eo」の名称から分かる通り、実質的にはケイ・オプティコムのサービスと言ってよい。

eo光テレビが地上放送を再送信できるのは、著作権法上「有線放送」として扱われるQAM方式を使っているためだ。ケイ・オプティコムは加入者宅に光ファイバーを2芯引き込んでいる。よって片方はインターネットおよび電話用のIP、もう片方はテレビ用のQAMに活用できるのである。「先見の明があった」とケイ・オプティコム通信サービス技術本部 ネットワーク

図1 トリプルプレイ競争における各社の実力比較

	NTT	KDDI	ソフトバンク	関西電力	スカパー (オプティキャスト)	ジュピター テレコム
CATV / 光伝送 の利用	IP伝送	IP伝送	IP伝送	光伝送	光伝送	HFC
事業規模	体力はある	体力はある	携帯投資を 前にSTB投資 余力は?	STB開発の 余力は?	STB開発の 余力は?	アナログからの 移行を見定める
柔軟・迅速な 意思決定が できる事業体制	グループ内調整 ・リソース分散	一事業者で ある強み	トップの 強い指導力	一事業者で ある強み	柔軟な マーケティング は困難	MSOとしての 強い指導力

HFC: 基幹に光ファイバー、ユーザー宅までは同軸ケーブルを使ったCATV網

(出典: 野村総合研究所)